

# 木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。  
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、  
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。  
今回は木曾川河口に開けた木曾岬町から、  
開拓の歴史や鍋田川を中心に紹介します。  
歴史ドキュメントでは、  
木曾三川の河道変遷をシリーズで特集します。

三重県木曾岬町

ふるさとの街・探訪記

輪中のまちから  
活力にあふれた水郷地帯へ

エリア・レポート

鍋田川の変遷と現状

気ままにJOURNEY

美しい水辺に浮かぶ、  
昔日の面影。

歴史ドキュメント

国界を変えた木曾川河道の変化

TALK&TALK

『濃尾平野の形成と河道変遷』

民話の小箱

キツネのひっこし





# 輪中のまちから 活力にあふれた水郷地帯へ

## 木曾岬町のあらし

木曾岬町は、三重県の最北端にあたる木曾三川の最下流部に位置し、木曾川と鍋田川に囲まれたデルタ地帯です。木曾川河口の三角州を魚のウロコ状に開拓し造成した輪中干拓地でした。地域は海抜ゼロメートル地帯にあ



木曾岬町空撮



名四国道 国道23号 開通、1963年

昭和三十八年、国道二二三号(名四国道)が横断すると交通も便利になり、土地改良事業も着々と進行。農地の整備が進み、農業の近代化が促

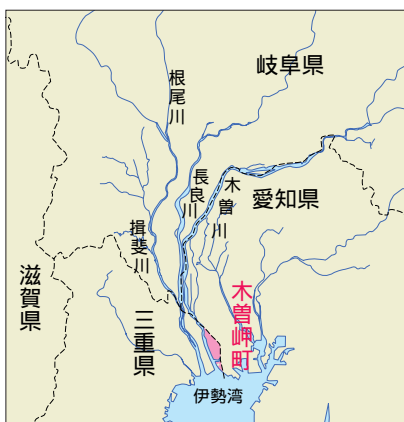


り、度重なる水害に見舞われましたが、その都度復旧に努め、水害と再開発を繰り返してききました。昭和三十四年(一九五九)の伊勢湾台風後、鍋田川が締め切られて愛知県と陸続きとなり、木曾岬町は現在のような姿となりました。

進されると、施設園芸も始められ、トマト等のハウス栽培が盛んに行われるようになってきました。景観が美しい木曾岬町は、全町が県立水郷自然公園区域に指定されています。

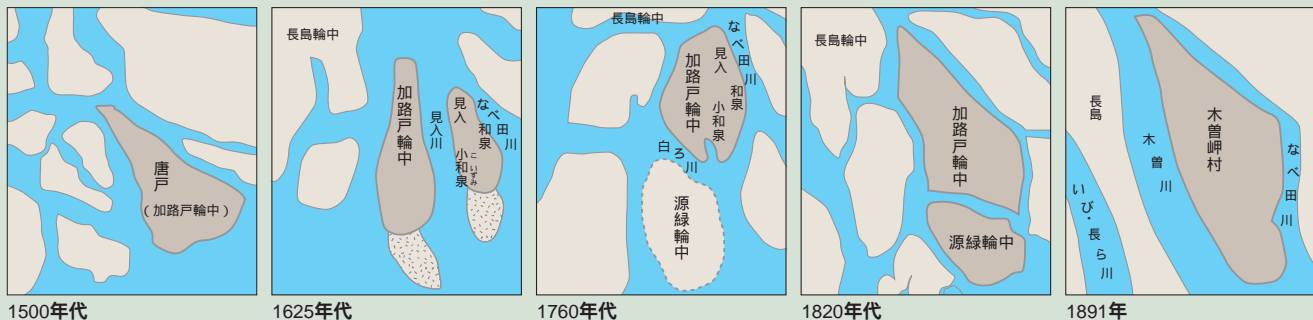
## 加路戸輪中前史

木曾岬町域で最も早く開けたところは伊勢・尾張間の航路の要衝でもあった加路戸でした。加路戸が文献に現れたのは中世のこと。室町初期の成立と伝える玄憲法師作の『庭訓往来』に、唐戸(現在の加路戸)の記載がありま



加路戸は長島一向一揆において、願証寺の東の拠点の一つとなりましたが、天正元年(一五七三)織田信長の長島一揆攻めの際、滝川一益の攻撃によって一度落城、再び奪取したものの、翌二年の七月には信長によって攻め落とされました。この時、織物・染織業者の多くは、信長の本拠・美濃・尾張に移つ

輪中の推移 一つになった木曾岬)



たと伝えられています。  
 天正一三年(一五八五)の地震により、加路戸は壊滅しました。せかく開拓された土地も放置されるなど、開拓の歴史はそのまま水との苦闘の歲月だったといえるでしょう。

輪中の開発

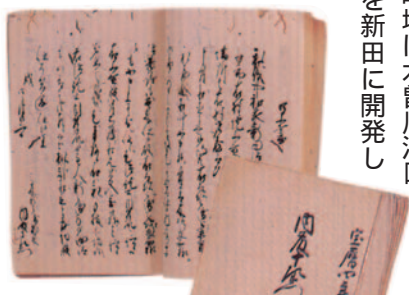
寛永二年(一六二五)長島藩の農民・諸戸喜左衛門が、地震で潰れた加路戸に新田を再開発したのを手始めに、延享四年(一七四七)まで、加路戸新田の南に接して、大新田・外平喜・近江島・西村海地・田代・雁ヶ地・松永・福崎・太郎地・豊崎・雁ヶ地付・同脇付・増田・小林島の各地が次々開発されて、加路戸輪中を形成しました。これらの開発者の多くは、長島藩の農民または尾張知多方面よりの移住者でした。また、加路戸新田の東の見入川を越えて、加路戸輪中の農民または美濃・尾張からの移住者が、寛永一五年に見入新田を開発したのを皮切りに、宝暦六年(一七五六)まで辰高・和泉・東対馬地・小林・小和泉・中和泉・富田子の各新田を開発し、見入輪中が成立しました。その後、宝暦の御救普請が行われ、その河川改修の影響で、加路戸輪中と見入輪中は統合され加路戸輪中と呼ばれるようになった。

源緑輪中は、文政二年(一八一九)に上源緑新田を開発、下源緑は文政七年笠松郡代支配代の松平左近が部下に命

じて開拓しました。その後、白鷺川以南の藤里新田・白鷺新田・松永新田などと一連の堤防を築き、源緑輪中となりました。

宝暦治水と内藤十左衛門

木曾岬町域は木曾川河口の葭生地を新田に開発してきたため、開発時より水の脅威から逃れられない宿命にありました。



「内藤十左衛門一件留み覚」(名古屋大学附属図書館所蔵・高木家文書)

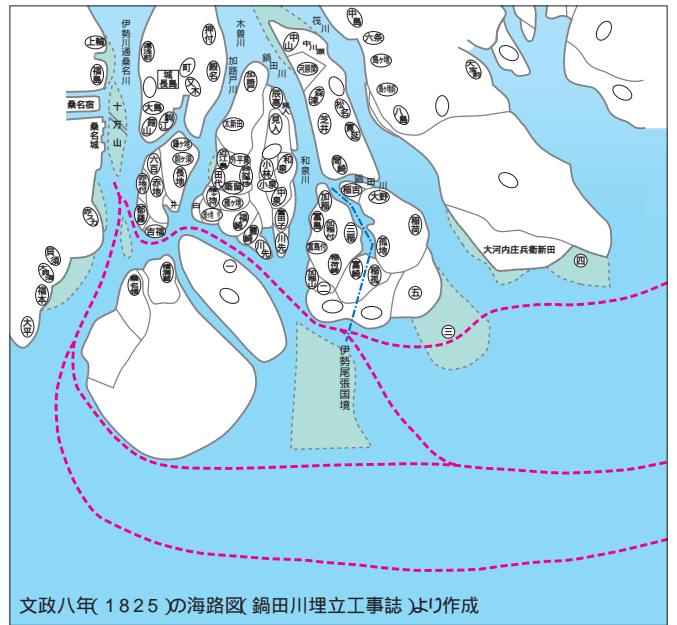
宝暦治水後の宝暦七年から九年にかけて、御救い普請が実施され、見入川の廃川と加路戸川(現在の木曾川)の川幅を広げる工事が行われました。宝暦治水のわずか二年後になぜこのような工事が必要だったのか、次ぎのような理由が考えられます。

御救い普請と見入川の廃川

宝暦治水の中でも難事業の一つといわれたのが、油島の喰違堰です。この工事は、洪水の際、大量の水が木曾川から揖斐川に流入するのを抑えるために、木曾川と揖斐川の合流地点の油島地先に締切堤を設けるものでした。しかしこれが実現した結果、木曾川の水はそれより下流の加路戸川へ従来より大量に流れ込むようになったため、加路戸川の川幅の拡張が必要になりました。

加路戸川の川幅の拡張工事とともに、加路戸輪中と見入輪中との見入川を締切り廃川とする御救普請が行われました。この結果、二つの輪中が統合されて新しい加路戸輪中が誕生しました。

明治二年(一八八九)、三重県令により加路戸輪中と源緑輪中の地域が木曾岬村となりました。



七里の渡しの航路と舟運

木曾三川の最下流部に位置し、眼前に海が広がっていたこの地域の唯一の交通手段は舟でした。東海道の熱田から桑名までの七里の渡しは、加路戸輪中と源緑輪中の間を流れる白鷺川を通り、過するコースもありました。文政八年(一八一五)の絵図によれば、熱田から桑名までの航路には、三つの方法があったようです。一つは、沖を遠く迂回する方法、一つは、陸地よりの海岸を通り、白鷺川、桑名市長島の青鷺川を通る方法、そして一つは、その中間を通る方法でした。この三つの航路は、舟の大小、天候の良し悪し、潮の満干等によって、使い分けられたと思われれます。つま

り、大きい舟は沖を通り、他の舟は中間を通ったり、また天候や満潮干潮の関係で、最短距離の白鷺川を航行したりしていたものと思われれます。

しかし、木曾三川の完全分流を目的とした明治改修が、明治二〇年(一八八七)から実施されると、白鷺川は締め切られ、加路戸輪中と源緑輪中が陸続きとなり、白鷺川を行く七里の渡しのコースは廃止となりました。

この七里の渡し以外にも、現在の弥富市や桑名市、津島市などの地域へも舟で往来しており、米や生産物、生活必需物資の運搬はすべて舟運に依存していました。

昭和初期までは、多度神社への豊作祈願に、舟で木曾川を上り、船頭平の閘門から長良川へ出て、その後揖斐川へ乗り入れて、多度へ上陸し、参拝に行っていたようです。

しかし、その後の道路の整備や自動車の普及によって、昭和三〇年代以降は、ほとんどが陸運となりました。

発展を遂げる水郷の町

昭和四〇年代までの、木曾岬村の主な産業は、稲作と河川や伊勢湾で行われていた漁業でした。漁業がいつごろから行われてきたかは不明ですが、万



昭和40年代、近代化する前の木曾岬

延元年(一八六〇)の大津波により老松輪中・源緑輪中・六野新田・上野新田が壊滅的な被害を受け海と化してしまっ



コンピュータで制御されたビニールハウス

ため、居住民が残存地区内に移転して漁業を営み始め、次第に発展したようです。明治三六年(一九〇三)、木曾岬村に漁業協同組合を作ったのは、黒宮兵太郎です。それまで木曾川河口では青海苔だけが生育していましたが、黒海苔の生育も可能なことに着目した黒宮は、木曾岬村での黒海苔養殖を実現させました。また、木曾岬村でハマグリ

の養殖を行ったのも黒宮でした。一方農業は、明治末期から排水機

の設置によって乾田化されると、麦・菜種・馬鈴薯の裏作が可能になりました。さらに昭和初期から戦後の食糧増産期に、木曾川の浚渫土砂によって、池沼などを埋め立てて土地区画整理が行われ、これに伴い農地や農道が整備されると、農業の近代化が促進され、施設園芸も始められました。現在では、米作のほか施設園芸が盛んに行われ、中でもトマトは三重県下でも有数の産地となりました。

平成元年には町制が施行され、木曾岬町が誕生しました。平成七年には、土地の有効利用を目的に鍋田川工業団地の造成事業が実施され、翌年には数多くの企業が操業を開始。木曾岬町の産業は、農業から工業へと移り変わりました。



トマト栽培

交通網は、伊勢湾岸自動車道などの広域交通網の整備が進んでいます。また、新たな都市基盤整備も進行中。中部国際空港・名古屋港・四日市港などとも近隣にあるという立地から、ますますの飛躍が期待されています。



2002年3月、伊勢湾岸自動車道、湾岸弥富IC～みえ川越IC開通

参考文献

- 『木曾岬町史(木曾岬村史改訂版)』平成一〇年 木曾岬町
- 『木曾岬町町勢要覧』平成一八年 木曾岬町
- 『わたしたちの町 きょうき』平成一八年 木曾岬町教育委員会
- 『角川地名大辞典 三重編』角川書店

# AREA REPORT

三重県木曾岬町

## 鍋田川の変遷と現状

### 鍋田川の成り立ち

愛知県と三重県の県境となつている鍋田川は、その昔、尾張国と伊勢国の境になつていたので、御境川とも呼ばれていました。江戸時代初期から

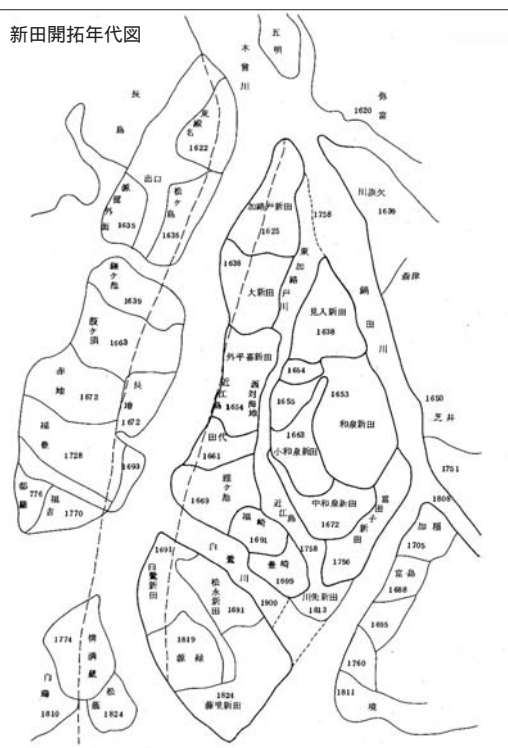


鍋田川

木曾三川河口部の砂州地帯が開発されるにつれて、鍋田川は順次形成されていきま

きました。つまり、海へ向かって進む新田開発と並行して、鍋田川は流路を整えていったのです。

鍋田という名称は、



新田開拓年代図

木曾川から流れ込んだ土砂が堆積し、鍋の底のように浅くなつた川といつところから、名づけられたのだらうといわれています。かつては東海道五三次の舟運の要路として栄え、群生する葭の間を舟で横ぎる航路は、鍋田越しの名称で親しまれていました。

### 伊勢湾台風前の状況

明治二〇年（一八八七）に着工された

河川改修（明治改修）により、逆川・大樽川・佐屋川・筏川などの派川が締め切られ、木曾三川の川筋が整備された中

で、鍋田川のみが伊勢湾台風まで木曾川唯一の派川として残されました。その当時の鍋田川は、現在の鍋田川上水門付近より分派し、愛知県海部郡弥富町と三重県桑名郡木曾岬町の間を流れる流路延長7.7km、平均川幅一五〇mの河川でした。

水深は非常に浅く、ところどころ洲が川面に現れているような状況でしたが、その後の洪水のたびに、土砂が下流部へ押し流され、水深は深くなる一方

その昔、御境川とも呼ばれていた鍋田川は尾張国と伊勢国の境を流れていました。舟運が人々の大切な交通手段だった頃、鍋田越しとして大いに利用されていたようです。昭和三年の伊勢湾台風後、鍋田川締切工事が行われ、その姿は大きく変貌しました。鍋田川の埋立造成地は、工業団地や憩いのスペースに利用され、木曾岬町の発展の一翼を担っています。

でした。半面、木曾川本流では加路戸地先に大きな洲ができ、水害発生の際、危険性は高まりつつありました。

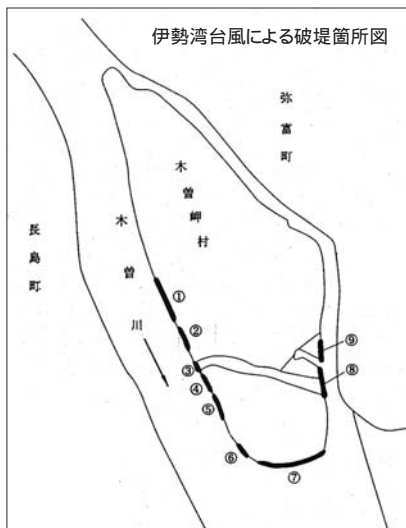
また、第一次世界大戦終戦前後の三度に及ぶ地震のため、木曾岬一帯の地盤は以前に比べ約七〇cmも沈下したため、水害の危険と隣り合わせの状況になりました。

こつした状況下、三重県では地盤変動対策事業として、昭和二四年（一九四九）から木曾川堤防及び鍋田川右岸堤の高上げ工事が海岸堤から上流に向かって行われ、堤防は約一m高くなりました。また、愛知県でも地盤変動対策事業が、昭和二八年から鍋田川左岸堤防全延長にわたり施工されました。

### 伊勢湾台風とその被害

昭和三四年（一九五九）の伊勢湾台風で、木曾岬村は全村が水没するといふ大きな被害を与えました。

海岸堤防が二ヶ所で、木曾川筋で五ヶ所が破堤、鍋田川においても二カ所が破堤しました。



家とともに流され、流木にもまれて死亡した人々もいました。この台風で人口の一〇%にあたる三三八名の尊い命が奪われました。

### 鍋田川締切工事

伊勢湾台風の災害復旧と再度の災害を防止するため、伊勢湾等高潮対策工事が実施されました。

木曾岬村では伊勢湾等高潮対策工事の一環として、鍋田川の締切工事と木曾川の拡幅工事が行われることとなり、鍋田川の締切工事は、昭和三六年



伊勢湾台風の被害

に着手、翌年には竣工しました。締切工事の概要は、河口部では隣接する木曾岬海岸堤

防と同じ高さの締切堤防とする。ともに、舟運と排水のために幅一〇mの水門を設け、高潮時以外は開放しておくこととしました。また、この河口締切位置から上流三百mに幅五mの水門を二基設置し、舟運のための開門と兼用させることとしました。

鍋田川の上流端、従来の分派点は、木曾川堤防によって締め切られ、用水取り入れのため幅七mの水門を設置しました。

また、鍋田川を締め切ることによって、木曾川から鍋田川への計画分流量は、木曾川本川が受け持つこととなるので、これによる水位上昇を避けるために、木曾川右岸殿名地先及び木曾川左岸加路戸地先で引提するとともに、浚渫を行い、河積を確保しました。

### 鍋田川の埋立造成工事

鍋田川締切に伴い、鍋田埋立造成が計画されました。埋立工事は、木曾川の浚渫土砂を利用しての昭和三八年に着手、昭和四六年に竣工しました。

また、鍋田川は、県境河川であったため、その県境確認の問題が生じました。そこで、愛知県・三重県・木曾岬村・弥富町及び中部地方建設局の五者が協議を重ねた結果、代替地の造成計画の変更によって調整がつき、県境界も川幅のほぼ中央付近に確定しました。

### 鍋田川埋立造成地の有効利用

昭和四六年、鍋田川の埋立造成が完了すると、土地の高度有効利用を目的に鍋田川工業団地の事業が計画されました。

造成事業は、平成七年三月に、三重県有地九六五haの払い下げを受けて実施計画に着手し、平成七年六月に町有地の一部を合わせ、一一五haの造成工事に着手しました。これと並行して企業誘致も進め、平成八年には、分譲面積の八割に企業の進出が決定し、操業を開始しています。

鍋田川工業団地には、工場用地一七区画をはじめ、公園や緑地、用排水が整備されました。

このほかに、鍋田川埋立造成地は人々が集う開放的なスペースとして生まれ変わりました。

昭和五七年に完成した鍋田川グラウンドは、ソフトボール場、テニスコートなどがあり、少年野球や会社や学校帰りの人たちが、爽やかな汗を流しています。

鍋田川は、締切工事や造成事業によりその姿は変貌しましたが、川



鍋田川工業団地

幅数mの河川として、今も人々に親しまれており、河川敷に整備された鍋田川いこいパークは、水と緑にあふれた憩いの空間です。

鍋田川堤桜並木は約四kmにわたり、ソメイヨシノを中心に約千五百本の桜が植樹されており、木曾岬町のシンボルとなっています。

淡いピンク色の花をつける季節には、毎年桜まつりが行われており、多くの人々にぎわいます。

桜まつりのメイン会場となっている鍋田川いこいパークにも、ソメイヨシノのほか、開花時期の異なるベンジダレザクラやカンザクラなどが植えられ、長い期間、桜を楽しむ人々が集います。

江戸時代の初期から、新田開発と並行して歴史を重ねた鍋田川は、水害や河川改修を繰り返しながら変貌し、今では木曾岬町の大切な水辺の空間として、人々に愛されています。

#### 参考文献

- 『木曾岬町史』、木曾岬町史改訂版（平成一〇年、木曾岬町）
- 『木曾三川治水百年のあゆみ』、平成七年建設省国土交通省）
- 『鍋田川埋立工事誌』、昭和四六年、木曾川下流事務所、愛知県、三重県、鍋田川工業団地、平成八年
- 長島町、木曾岬町土地開発公社、木曾岬町



桜まつり

# 美しい水辺に浮かぶ 昔日の面影。

## 美しい水辺に浮かぶ 昔日の面影。

初夏の陽射し浴びて輝く木曾川。歌人の心をとらえた風光明媚な景色。川とともに生き、歳月を築き上げてきた木曾岬町は美しい水郷のまち。そんな歴史を訪ねて、旅してみましょ。

### 水と人との遙かな旅路

木曾川が最も海に近づくところを開けた木曾岬町。春には鍋田川堤防の桜のトンネルが人々の目を楽しませ、夏はマリンスポーツを楽しむ人で賑わい、秋には、木曾川河口に釣り船を浮かべ、カレイやセイゴ目当ての太公望たちが腕を競い合います。



ジェットスキー



鍋田川堤桜並木

その景観の美しさから、全町が県立水郷自然公園区域に指定されている木曾岬町ですが、歴史をひも解けば、その昔は海の底、川が、土砂を運び、海上にできた寄り洲に葎が生え、洪水のたびに土砂は沈澱・堆積を繰り返して洲を作り、そこに人々が暮らし始めるようになりしました。

この町のルーツをたどれば、水と人との遙かな旅。まぶしい初夏の太陽を浴びながら散策すれば、そんな歴史が見えてくるかもしれません。

### 開拓史を物語る富田山源盛院

一七世紀初頭から寄り洲を新田に開拓し、歴史を築き上げてきましたが、富田彦兵衛もそうした新田を開拓した一人です。もともと知多郡の豪農で、海を渡って一族ともども移住し、和泉新田や西対馬新田を開発したといわれています。富田一族は、真言宗妙楽寺の末寺を拠点に干拓を進めていったようですが、富田彦兵衛はこの寺を曹洞宗に改宗して富田山源盛院とし、土地を寄進して、その開基となつたようです。

ちなみ

に、富田彦兵衛が開拓した西対馬新田は、天保九年（一八三八）の洪水で堤防が決壊し、復旧が困難となりましたが、その二年二月（一八三九）に復旧工事が完成したといわれています。若秀の墓は、西対馬の墓地にあります。



富田山源盛院

富田山源盛院や若秀の墓は、開拓の歴史を物語る証人です。富田山源盛院は火災や伊勢湾台風による水没などで被害を受けましたが、昭和四十一年に再建されました。

### 芭蕉の句碑を訪ねて

木曾岬町には俳聖と称えられる松尾芭蕉の句碑が残っています。青柳の泥にしたたる 汐干かな

これは、富田山源盛院に残されている芭蕉の句碑です。かつてこの辺りは松や竹藪が生い茂っていたようですが、芭蕉がこの句を詠んだ江戸時代初期には、泥や海の水にまみれた青柳が、それでも自然の香気を放っていたのでした。



芭蕉碑

この句碑ができた宝暦八年（一七五八）、獅子吼山了清寺にも、芭蕉の句碑が建立されました。

永き日を 囀りたらぬ 雲雀かな  
雲雀は野原に巣を作るといいますから、芭蕉がこの句を詠んだ江戸時代、雲雀は、葎原の巣から空を目指し、高く飛び立ちながら囀っていたので



獅子吼山了清寺

## 季節を彩るイベント やるまい夏祭り

8月第1土曜日

夕方から繰り広げられる納涼祭で、自主的活動委員会(BORRA)の企画・運営による、町民手作りのやるまつりです。一般参加者による出店や特設ステージでのパフォーマンスなど、多彩な催しで、夏の暑さを吹き飛ばします。



## イルミネーション点灯式

11月最終土曜日または12月第1土曜日(イルミネーション11月末-1月中旬まで)

木曾町役場駐車場に設置された約12mの時計塔は、光きらめくツリーに姿身し、ロマンティックな雰囲気演出します。模擬店や一般参加者によるパフォーマンスも繰り広げられ、一年の締めくくりをにぎやかに飾ります。イルミネーションのメインタワーには、町のキャラクターマークであるトマピーの姿も輝きます。



## 祭情報 ~ FESTIVAL INFORMATION ~

2月	輪中駅伝大会	9月	敬老会
3月	伸びゆく木曾町の ふれあい広場	10月	町民体育祭
4月	桜まつり	11月	秋の文化祭
8月	やるまい夏祭り		イルミネーション点灯式



## 交通のご案内

### 名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋市 → 名古屋高速・東名阪自動車道 (約13分) → 弥富IC → 一般道・国道1号 (約10分) → 木曾町

### 四日市方面からお車をご利用の方

四日市市 → 伊勢湾岸自動車道 (約17分) → 湾岸弥富IC → 木曾町

## お問い合わせ

### 木曾町役場

〒498-8503 三重県桑名郡木曾町大字西対海地251番地  
TEL 0567-68-8111 <http://www.town.kisosaki.mie.jp/>

この地には、芭蕉のほか、ホトトギスや馬酔木で活躍した俳人・山口誓子の句碑もあります。彼は東海道七里の渡し跡を漫步し、白鷺川跡にたつて、句を

## 山口誓子の 七里の渡し記念句碑

創建から約三世紀、清寺は木曾岬町の開拓史を見守り続けてきたので、よ。この寺は今もなお、人々の信仰を集めています。

七里の渡しの句碑として彼の句碑が建

明治改修などの河川改修で締切工事が行われ、木曾岬町の姿は大きく変貌しました。しかし、昭和初期までは、小川や池沼がいたるところにあり、松や雑木が生い茂った森が、鶴の森と呼ばれ、鶴の棲みかとなっていたようです。

きつと山口誓子も、そつした豊かな風景を句に込めたのでしよう。昭和五六年



山口誓子碑

詠みました。青葙の芭蕉の水路、なほ残る白鷺川は、明治二〇年に実施された河川改修で締め切られた河川です。誓子はその締切地点に立ち、芭蕉が生きていた江戸時代の白鷺川に想いを馳せたのでしよう。



木曾岬町立文化資料館

## 今なお残る在りし日の面影

伊勢湾台風などの水害や度重なる河川改修でその姿は変わりましたが、在りし日の面影はまだまだ各地に残されています。

東丸山の堤防の両岸には、昔ながらの竹藪があります。数多く伝わるキツネの伝説は、こつした竹藪から生まれたものなのでしようか。ほかに、和泉神社や

てられました。

川先新田の堤防の老松などが、歳月に風化されることなく、堂々とした緑を茂らせています。こつした自然だけではなく、もつと木曾岬町の歴史を知りたいのなら、木曾岬町立文化資料館へ足を伸ばしてみましよう。一階は、まちのパノラマ模型展示やレテオ上映で、歴史や生活などを紹介し、民家の復元ジオラマ模型では、低湿地帯農業の様子を再現しています。また一階には、伊勢湾台風や復興の様子を写真展示している特別展示コーナーもあります。



木曾岬町立文化資料館展示品





# 国界を変えた

## 木曾川河道の変化

古代に制定された国郡は多少の変更があったものの近世まで存続していました。こつした国郡の境界の中には、河川に設定されたところも多く、時には河川の流路が変わったことで境界が変更されることもありました。天正一四年（一五八六）の木曾川河道の変化に伴う国界の変更はその代表的なケースでした。

古代、律令制度の中で、北海道を除いた全国が六十六の国に分割され、さらにその下に郡が置かれていました。その形は現在の県都市の行政区として名残をとどめています。このような国や郡の界は、河川や山脈の稜線などの地形の変化点によって設定されてきました。現在でも橋の中央や峠に県境標識が立てら

れていたり、「国界橋」や「郡界橋」が各所に存在しています。

現在の境川はかつての木曾川

古代の木曾川の主流は、続日本紀第三〇巻に「神護景雲三年（七六九）九月壬申 尾張國言 此國与美濃國堺有鵜沼川」と記されているように、

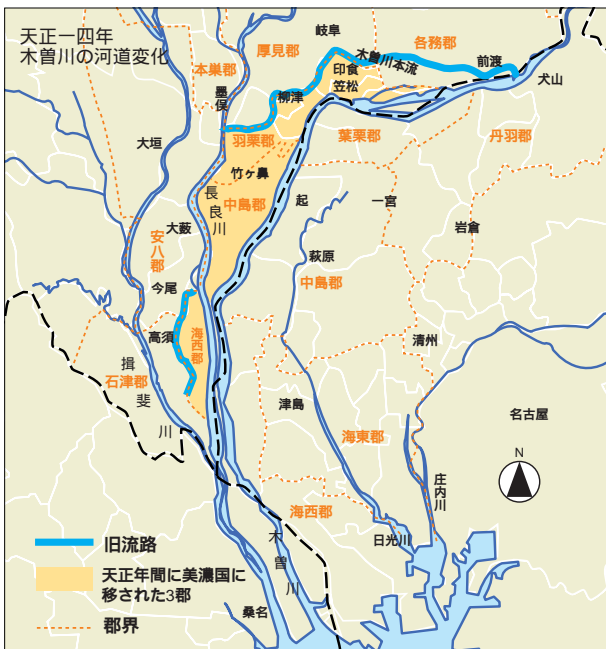
「二の枝川」とも呼ばれ、その「二の枝川」に当たる三宅川の沿岸には、尾張国分寺（稲沢市矢合町）が建立され、さらに、その上流には、尾張国府（稲沢市国府宮）が置かれていました。

当時の木曾川（古木曾川）の流路を現在の地形図で見ると、犬山から各務原市伊木山を過ぎるまでは、現在の流路とほぼ同じ流れをしめていました。が、各務原市前渡東町付近から、やや北向きに流れ、岐阜県道九五号と羽島用水路・三井川に沿って前渡西町・松本町・小佐野町などを経て、岐阜市高田町付近で現在の境川筋に至り、これより下流、墨俣までは、現在の境川の流路が木曾川の本流であったと推定されています。

この時代、墨俣までの木曾川右岸の美濃国では各務・厚見の一郡、左岸の尾張国では丹羽・葉栗・中島の三郡がありました。しかし、これらの国が行政単位として機能していたのは、貴族政治下にあつた平安時代後期までで、武士が台頭して守護や守護代など豪族を中心とする土地の領有化がおこり、応仁の乱（一四六七）が終る頃から、戦国大名達による領地単位の統治、すなわち分国経済の時代がはじまり、これがさらに拡大して国界を跨る領地が形成されるようになりました。

### 天正一四年の大洪水

天正一三年（一五八五）木曾川流域の北側と、河口部の二ヶ所を震源地とする大地震が起り、岐阜県白川村の帰雲山が崩落し、河口では三重県木曾岬町の中心の加路戸輪中が陥没し亡所となる地形の大変動がありました。その翌年の天正一四年（一五八六）



犬山付近は鵜沼川とも呼ばれ、美濃と尾張との国界を流れていました。犬山から濃尾平野に出て、木曾の七流とも言われていたように、当時の木曾川は、乱流して多くの派川を作り、現在のように本流が明確ではありませんでした。これらの派川の主なものは、「一の枝川」

「一の枝川」とも呼ばれ、その「一の枝川」に当たる三宅川の沿岸には、尾張国分寺（稲沢市矢合町）が建立され、さらに、その上流には、尾張国府（稲沢市国府宮）が置かれていました。当時の木曾川（古木曾川）の流路を現在の地形図で見ると、犬山から各務原市伊木山を過ぎるまでは、現在の流路とほぼ同じ流れをしめていました。が、各務原市前渡東町付近から、やや北向きに流れ、岐阜県道九五号と羽島用水路・三井川に沿って前渡西町・松本町・小佐野町などを経て、岐阜市高田町付近で現在の境川筋に至り、これより下流、墨俣までは、現在の境川の流路が木曾川の本流であったと推定されています。

六月二四日に大洪水があり、木曾川の流れが大きく変わりました。

激流は、江南市草井町と各務原市前渡東町から真西に向かつて流れ、尾張国の葉栗・中島郡の中央を貫流して村々を押し流して新しい流路を作りました。

この流れは、江南市草井町付近から上中屋・間島・栗木の諸村内を貫流して、松林寺・水田島を呑込み、円城寺村(笠松町)と北方村(一宮市)との間を貫いて、南西に大きく向きを変えて直進して、加賀野井川を作り海西郡で木曾川流路に流れ込み新たな木曾川の主流となりました。

このため、加賀野井村のように一つの村が分断され、左岸に一宮市東加賀野井、右岸に羽島市下中町加賀野井のように旧名が現在も残っています。各務原市川島河田町と一宮市浅井町河田、羽島市正木町光法寺と木曾川町三ツ法寺などもその名残りです。

一方で天正の洪水は、中島郡小信島(一宮市小信中島)から南流する小信川や、駒塚村と加賀野井村(現在羽島市竹鼻町駒塚)の間で北西



江南市草井付近の流路

に流れる逆川を作りました。

この時、織田信長の跡を襲って全国統一を進めていた豊臣秀吉は、尾張国の葉栗・中島・海西三郡の内百二十ヶ村を分割して美濃国に移し、この新しい木曾川の流路を新しい尾張と美濃の国界に変更しました。

### 美濃国と尾張藩領

新しい国界によって尾張の百二十ヶ村が美濃国に属することになりましたが、支配関係は依然として為政者の意志により左右されていました。戦国時代が終わり徳川幕府による幕藩体制下では、六六国に約三百の藩が置かれたため、一国一円を支配する大名は尾張・土佐など僅か七ヶ国に過ぎず、美濃国では、大部分が幕府や尾張藩領として支配されました。

美濃国の木曾川沿岸を支配していた齋藤氏は、天文年間には尾張国犬山城を出城としてるように尾張に勢力を広げていましたが、永禄六年(一五六三)に織田信長によって落とされ、信長による尾張美濃の二国統治が始まり、経済面での国境の意味がなくなりしました。

その後継者の豊臣秀吉は、木曾川河道の変化が起る前の天正十年(一五八二)に、太閤検地を開始し、各村・国毎の耕地面積を明らかにして、石高を定め大名知行制を確立しています。これによって国界と行政経済が一致し

たと言えます。

しかし、江戸時代において美濃国は石高約六〇万石といわれていたが、そのうち尾張藩関係領が二五万石、幕府直轄領も二〇万石におよび、再び国界を越えた領地支配が始まりました。

### 羽島の由来

美濃国に移された葉栗郡と中島郡の一部の村は、現在の岐阜県羽島郡笠松町・岐南町と羽島市の全域および岐阜市のうち旧柳津町の一部(佐波地区を除く)の地域です。当時の郡名であった葉栗郡は、美濃国では、地域の旧名から「羽栗郡」。中島郡も同様に旧名をもとにして改めて、「中島郡」と名乗りました。これは江戸時代の天保郷帳(一八三〇、一八四三)に見ることが出来ます。また両郡は、明治三〇年(一八九七)に合併し、互いに一字づつ出して、「羽島郡」としました。

天正の大洪水によって、墨俣で長良川を合流していた従来の木曾川は、各務原市を水源とする長良川の支流境川に変貌し、国界の川から



墨俣付近の長良川

郡界の川になりました。

この境川下流の左岸堤防は、往古は鎌倉街道として重要な働きをしていましたが、江戸時代に入っても

関ヶ原の戦いに勝利を収めた徳川家康が凱旋した「吉例街道」であり、中山道「垂井宿」と東海道「熱田宿」を結ぶ脇街道「美濃路街道」として栄えました。

### 立田輪中と佐屋川

徳川家康は、慶長十三年(一六〇八)には、木曾川の左岸に犬山から弥富まで「御囲堤」と呼ばれている長大な堤防の築堤に着手しますが、慶長十年(一六〇五)には小信川など派川の締切工事を開始し、御囲堤の完成によって木曾川左岸の派川はすべて締切られ、ほぼ現在の木曾川筋が出来上がりました。

御囲堤の外に置かれた立田輪中は、この時期では中小の輪中の寄り集まりでしたが、寛永元年(一六二四)に藩主義直によって大輪中に整えられました。この立田輪中と御囲堤の間に流れている佐屋川は、木曾川の洪水処



美濃路一里塚付近の境川

理と材木の流送を目的として、正保三年（一六四六）に分派口を広げて作られ、明治改修（明治二〇年着工の河川改修事業）によって廃止されるまで、木曾川の派川として舟運などに利用されてきました。

高須輪中を縦断していた古木曾川

天正一四年以前の木曾川が長良川を合流していた墨俣付近では、墨俣川とも呼ばれていました。流路は、ほぼ現在の長良川の流路に沿って流れ、海津市平田町勝賀付近から現在の高須輪中の中に入り西に流れ、平田町岡・平田町三郷を経て平田町西島と海津町松の木の間、海津町立野と海津町札野の間を南下して海津町深浜と海津町石亀の間を経て、海津町古小島と海津町福江の間を流れて現在の長良川の流路に達していました。



なわち現在の大江川筋を流れていたと推定されています。この古木曾川の左岸は尾張国海西郡。右岸側は美濃国安八郡・石津郡でした。



金廻輪中堤

天正一四年（一五八六）の洪水は、高須輪中にも大きな被害をもたらしました。新たに加賀野井川を作つて流れてきた激流は、高須の各輪中内に氾濫しましたが、主流は、海津市海津町成戸から真南に偏向し、立田輪中群と高須輪中群の間、すなわち現在の木曾・長良の川筋を南下するようになりました。

この付近の江戸期以前の地形は、高須・秋江など各輪中の形成過程を考えると、小さな輪中が点在していて洪水は気ままにその輪中の中を流れ、木曾川としての形態が整っていなかったとも考えられます。

海西郡の誕生

古代の国は、和名類聚抄（承平四年（九三四）頃成立）によると美濃国は一八郡、尾張国では八郡、伊勢国では一五郡によって成り立っていました。そのうち、犬山から河口までの区間で木曾川に接していた郡は、美濃では各務・厚見・石津の三郡、尾張では中島・海部・葉栗・丹羽の四郡、伊勢では桑名の一郡でした。

江戸時代の天保郷帳（一八三〇～一八四三）によると、美濃では中島・羽栗・海西の三郡、尾張では海西郡を新たに見ることが出来ます。海西郡は、海部郡が海東と海西に分れたものですが、吾妻鏡（鎌倉時代）一八〇〇～一三三三の成立では、すでに海西郡を見ることが出来ます。

海部郡が海東郡と海西郡に分割された時期や理由は明らかではありませんが、佐屋川・善太川を境に海東、海西とされました。このことは、高須輪中と立田輪中間の水路、現在の木曾川（長良川筋）の規模は、佐屋川に比べて狭かったことが想像出来ます。

しかし、尾張と美濃の国界が加賀野井川（現在の木曾川）から立田輪中群と高須輪中群の間の木曾川の主流の中心に置かれたため、海西郡のつち、新しい木曾川の西側に位置している野村・岡・幡長・須脇・蛇池・野市場・鹿野・松ノ木・古小島など現在の海津市

に属する地域が美濃国に移されました。このため海西郡は尾張国と美濃国の双方にできました。

美濃国の海西郡は、明治三〇年（一八九七）に、下石津郡（明治一二年に石津郡が上、下の二郡に別れた）と安八郡の一部が合併して海津郡となりました。

尾張国の海西郡は、大正二年（一九一三）に海東郡と合併して海部郡となりました。

明治四年（一八七二）中島郡東加賀野井村・馬飼村などが岐阜県とされましたが、明治二〇年（一八九七）に再び愛知県とされたように、このほかに、明治時代に入っても県境に若干の変化がありました。

このように天正一四年（一五八六）の洪水によって、新しい流路を得た木曾川は、江戸時代に入って、加賀野井川の拡張や新しい輪中の誕生、輪中の統合が進むとともに、宝暦治水などの治水工事によって、次第に河川としての形態を整え、国界の川として明治改修を迎えました。

参考引用文献

- 木曾三川流域誌
- 平成四年 建設省中部地方建設局
- 岐阜県治水史 昭和五八年 岐阜県
- 笠松町史 上下巻
- 昭和三二・三三年 笠松町
- 愛知県の歴史 平成八年 塚本学他
- 海津町史 昭和五八年 海津町
- 羽島市史 全三巻
- 昭和三九・四一・四六年 羽島市



# 濃尾平野の形成と河道変遷

花園大学名誉教授 文学博士 伊藤安男氏



伊藤 安男氏

立命館大学文学部地理学科卒業。花園大学名誉教授  
文学博士 岐阜地理学会会長、岐阜県古地図文化研究会  
会長。主なる著書『輪中』『ふるさとの宝物・輪中』『写真  
集 輪中』『変容する輪中』『空から見た名古屋・岐阜』『岐  
阜県地理あるき』『東山道の景観と変貌』『長良川がある  
く』『安八町、9.12豪雨災害誌』『治水思想の風土』『地図で  
読む岐阜』『岐阜県地理地名事典』など多数。  
現在大垣市在住

## はじめに

木曾三川流域の歴史は治水史そのものであるといつても過言ではない。そのため多くの先学により調査研究され著作も多い。なかでもそれを代表するものが労作といわれる、岐阜県治水史・上・下(昭和二十八年)である。

名著とされるこの好著も、近年の斯学の進展などにより再評価されつつある。具体的には河道変遷、輪中成立時期、宝曆治水、デレーケの明治治水などがそれである。例えば筆者が昭和四八年(一九七三)に高須輪中の四二四名を対象に、平田鞆負とデレーケの知名度をアンケート調査した結果、平田鞆負を「よく知っている」が三六三名で八五・六%に対し、デレーケはわずか四人の一〇%である。現在の知名度と比較すると隔世の感であり、斯学の進歩を如実に証左している。

## 大樽川・佐屋川は木曾川の旧河道

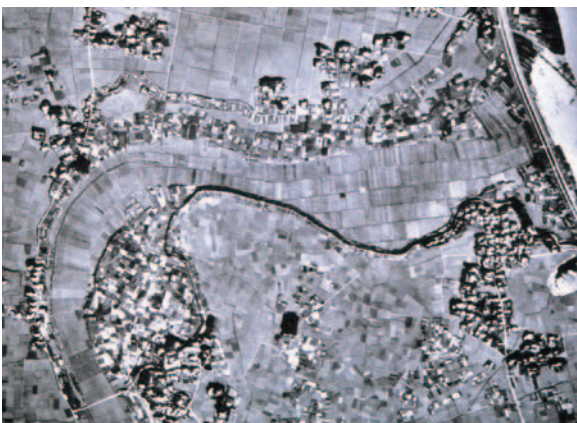
「日本で生活していると、河川というものはいつも同じところを流れていると錯覚にとらわれる。日本では、事実、大河川であるうと小河川であるうと、堤防・護岸で囲まれ、常に同じところを流れている。しかし、これは本来の姿ではなく、河川は本来自由に河道を変えらるものである。それを日本では歴史時代に人為によつて一定の場所を流れるようにしてしまつたのである……」

大樽川は岐阜県安八郡輪之内町東大藪にて長良川より分流して西南流し、現海津市平田町今尾にて揖斐川に流入する河川である。この大樽川は元和五年(一六一九)に開削された人工河川とされてきた。『岐阜県治水史』の「元和二辰年六月大水にて脇田堤切 入水 海用留出来之処 又八月切入水海用留 翌己の正月海用留出来 同三己年五月又切入 七月迄にも海用留不出来 輪中一統 大樽川新規に願出る。」



写真(1) 大樽川の自然堤防  
黄色が自然堤防(土地条件図 津島 図幅)

同五末年十二月迄に大樽新川出来 脇田海用留も比時出来 四ヶ年之内不作」とある。この出典は、『百輪中旧記』であり近年になりこの史料は後世の作とされている。この史料の脇田は高須輪中北部の長良川右岸にあり、ここより下流約三千口の地点が木曾川と長良川の合流点であり、出水時には河床の高い木曾川の洪水が長良川に逆流する。



写真(2) 廢川化された大樽川  
昭和22年米軍撮影

そのため海津町成戸から平田町蛇池野市場 野寺にかけて右岸域は高須輪中のなかでももっとも破堤回数が多い地帯であった。

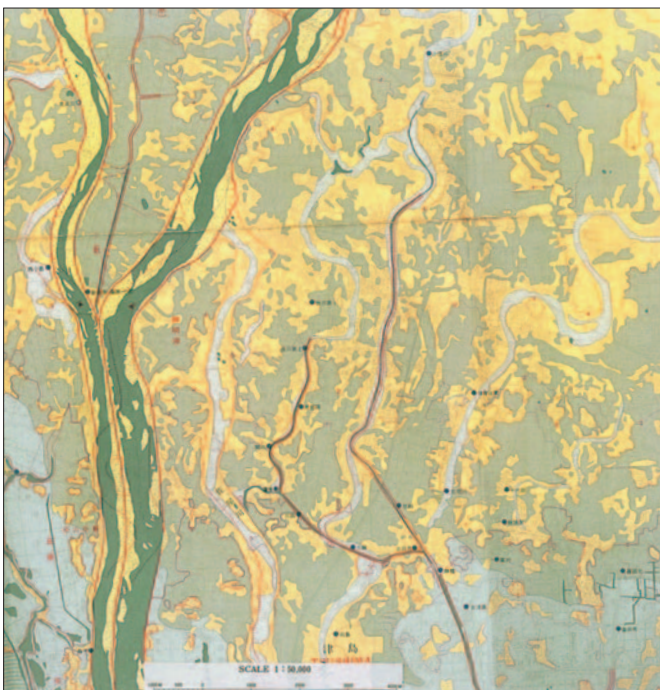
さきの史料にみられるように元和二年(一六一六)六月に蛇池の脇田が破堤入水、同年八月に再び破堤、翌三年冬によつやく修築するが、同年五月に再び破堤する状況であった。この度重なる

水害の傷痕は切所地の押堀 に見られ、高須輪中百間一寸之分間絵図(延享三年 一七四六)によると、勝村(現平田町勝賀)より成戸村(海津町成戸)までの約四キロの間に一〇の押堀が記載されている。また字絵図にそれに関連する地名として、北より蓮池、梶池、宮池、切戸、北池、蛇池、深成法越などがみられる。

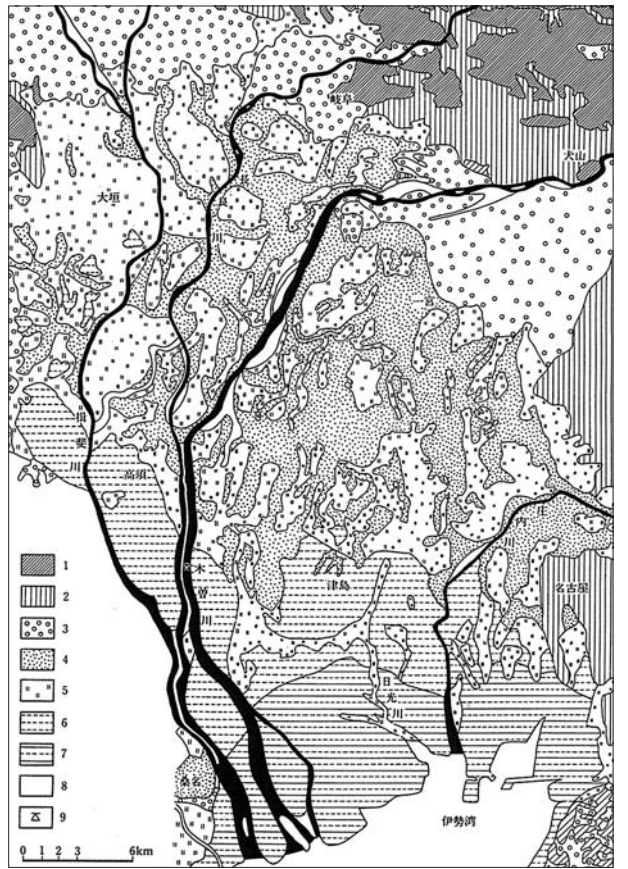
破堤入水による惨状は、水入よりも砂入にみられ、各村の耕地は砂下となり砂除扶持米を拝借し一〇か年の年貢御免を願っている。

この高須輪中北部の長良川右岸域の水害防除のため、長良川の洪水を分水して放水路を開削したとする説は、きわめて説得力がある。前述の『岐阜県治水史』および『百輪中旧記』の新川説は

現在のなお広く信じられている。この説に対して額田雅裕は次の論より新川説を否定している。第一は表層堆積物の粒度分析の結果、木曾川左岸の河畔砂丘と同一のものが認められる。第二に大樽川両岸に河川氾濫堆積物である自然堤防列の分布もみられ、これとである。(写真1X2(参照))これは旧木曾川の名残川である境川と同一タイプのもので、木曾川の形成営力にするものとしている。第三は大樽川が自然の蛇行流路の形態を呈しており、人工的に掘削した流路としては不自然である。第四は湾曲した水路をわざわざ掘削したとは考えられない。土木技術的な原理からみて、障害となるものがないければ最短距離の工事となる。近年の放水路をみればすべて直線的である。



第2図 廣川化された佐屋川と自然堤防列 (濃尾平野河川地形分類図(大矢雅彦作成)建設省木曾川上流工事事務所)



第1図 濃尾平野水害地形分類図 (大矢雅彦『河道変遷の地理学』古今書院 平成18年より引用)

最後にこれほどの人工河川の開削を目論見すれば、それにもなつ史料がなければならぬ。とくに揖斐川筋の村々は水害が激化するため障りを申立てる水論が起きて当然であるのに、それらも見当たらない。

以上のことから大樽川は人工河川ではなく、木曾川が境川を流路としていた当時その下流側の旧木曾川の流路と推定できる。その後の室階治水の洗堰築立を考えると、砂堆により閉塞状態であった流頭部を開削し、河道を浚渫して流路を整備したものである。

濃尾平野の地形を分類すると、北より扇状地帯、自然堤防と後背湿地地帯、三角州地帯、干拓地帯となる。

このよつな読図から佐屋川の形成を考えると、この河川を新規に開削され

最後はこれほどの人工河川の開削を目論見すれば、それにもなつ史料がなければならぬ。とくに揖斐川筋の村々は水害が激化するため障りを申立てる水論が起きて当然であるのに、それらも見当たらない。

以上のことから大樽川は人工河川ではなく、木曾川が境川を流路としていた当時その下流側の旧木曾川の流路と推定できる。その後の室階治水の洗堰築立を考えると、砂堆により閉塞状態であった流頭部を開削し、河道を浚渫して流路を整備したものである。

濃尾平野の地形を分類すると、北より扇状地帯、自然堤防と後背湿地地帯、三角州地帯、干拓地帯となる。

このよつな読図から佐屋川の形成を考えると、この河川を新規に開削され

であり、この自然堤防列にはさまれた地形が後背湿地であり、弥生時代初期には自然堤防上に集落は立地し、後背湿地に水田を開いた。

濃尾平野では大山を頂点とする半径十二キロメートルの扇状地があり、扇端部は一宮市浅井町から岩倉市北部にいたる半円状で、そこより標高一二メートル以下は自然堤防帯の氾濫平野で、その南端は名古屋北部、甚目寺、津島高須にいたる線である。約一二メートルから二メートルの間は自由蛇行して氾濫を繰り返して自然堤防を形成してきた。したがって自然堤防列の分布から旧河道は推定できる。

た人工河川とはいいがたい。

『岐阜県治水史』其の他では…木曾川が山間部を出てから七里の距離における第一の派川で、正保三年開削された」とある。

佐屋川の開削について「木曾川の逃れ水」と称され木曾川の洪水処理の放水路の役割を果たしたとされており、他の河川と比較して佐屋川が直線状の河川景観であるのはそのためであるとす

る説もある。

しかし、第2図の河川地形図をみても分かるように、佐屋川流路に沿って長大な自然堤防の形成をみることができ

る。正保三年（一六四六）開削の人工河川とみるならば、大樽川と同様にこのような自然堤防の発達を考えられな

い。

木曾川は等高線二メートル以下の自然堤防帯になると自由蛇行の氾濫をくり返し、大樽川がそうであったように、中世には多くの分派川をもつていた。例えば第3図のように尾張側では小信中島村から左折した木曾川は萩



写真(3) 河畔砂丘を利用した連続堤  
砂山長三百五拾間（神明津村絵図、天保12年）

原から萩原川（日光川の前身）と領内川の流路を經由して津島、佐屋を流れ、当時の海岸線の五明付近で伊勢湾に注いでいた。

佐屋川も同様に木曾川の旧分派川であったものが、木曾川の堆砂により埋塞されたものである。木曾三川のなかでも木曾川は上流部は流紋岩系の地質の上に破砕帯が多いためもともと土砂供給量が多く、高須輪中の成戸量水標地点で明治二十年（一八八七）から昭和二十七年（一九五二）の六五年間に一八五センチの河床上昇が報告されている。

その上、木曾川左岸域は河畔砂丘の形成がいちじるしく、わが国では利根川とともに広く知られている。これは北西季節風の風砂によるものである。

天保二年（一八四二）の神明津村（現祖父江町）の村絵図によると、連続堤の間に、砂山長三百五拾間」と描かれている部分がある。（写真3（参照）砂山とは河畔砂丘であり、長さ約六三六メートルの砂丘を連続堤に利用していることである。

佐屋川の場合も多分にその流頭部が河畔砂丘により閉塞されたので、その部分を開削し領内川の合流点、鷹場新田まで通水したのが正保三年のことである。さらに佐屋川が新川でないことを証するものに津島湊がある。津島

は自然堤防帯の最南端

にありその

微高地に、

織田、豊臣、

徳川の三代

にわたり尊

崇をうけた

式内社、津

島神社があ

り、門前町

渡津集落として繁栄した。中世には鎌倉街道の要衝であり木曾川河口を二二

キロさかのぼり佐屋川から天王川（津島川）にはいり、（写真4（参照）津島に

上陸し古代の海岸線に沿って陸路、熱田にいた。この津島湊も佐屋川の河床

上昇による逆流のため機能を失い、埋もれた湊となり佐屋湊へと移って

いく。佐屋川と立田輪中との関連については諸説あるが紙数の関係上ここでは

ふれないこととする。



写真(4) 津島湊として繁栄した津島川（天王川）の河跡、天王池（伊藤安男撮影）

平野にもぐつたまま養老断層に向って低下し、緩やかな谷底状をなし鍋田干拓地付近で礫層面は現海面下五〇メートルにおよんでいる。

この大規模な犬山扇状地面を切りきざむ多くの網流河川があった（第4図参照）これらの河川を一之枝川、二之枝川、三之枝川などと呼称したのは、このような河川景観に起因している。

尾張藩は創設まもない慶長二三年に史上名高い御囲堤を築立てる。御囲堤の典故とされる『国秘録』によると、木曾川堤築立、慶長十三戊申、同十四己酉兩年二成」とある。この年代については諸説あり多くの問題点が提起されている。この築堤により三派八流と呼称された網流河川はすべて締切られるが、その後は扇状地の旧河道の谷を利用して、木津用水、宮田用水、般若用水などを開削し水奉行をおき水地域の水利管理している。

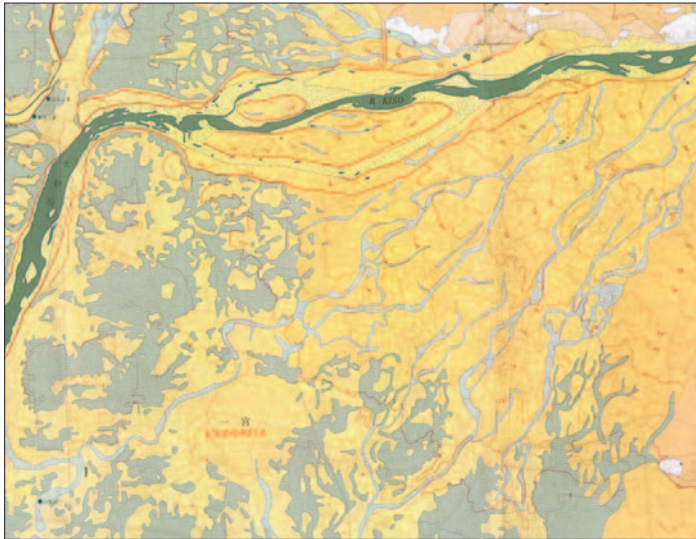
いっぽう扇状地を離れて締切られた

### 御囲堤と分派川の締切

天正一四年（一五八六）の木曾川河道の変遷により中流部が現河道となるが、犬山を頂点（扇頂）として半径二二キロ、面積一〇一、八五平方キロメートルの大扇状地を形成している。扇頂部の標高約四〇メートル、扇端部は約一二メートルでありその比高差は二八メートルである。厚さ一五〜二〇メートルの扇状地礫層が、自然堤防帯の氾濫



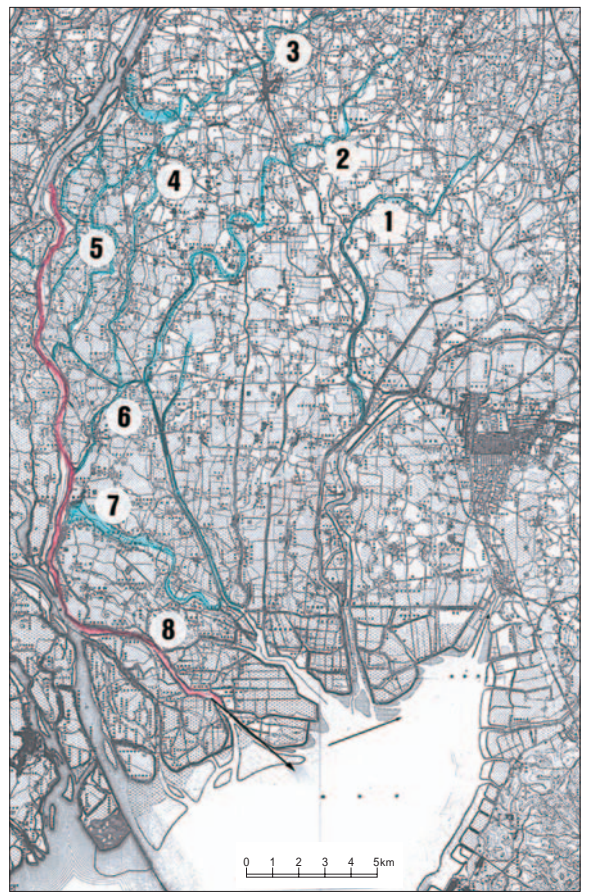
写真(5) 二之枝川の末流、三宅川  
前方の森付近が尾張国府跡、当時は大河であった（伊藤安男撮影）



第4図 犬山扇状地と御田堤に締切られた分派川（濃尾平野河川地形図）  
水色の横線が旧河道

三派川は扇端部の湧水をつけて長大な平野川となり自由蛇行しつつ氾濫をくり返した。一之枝川は犬山の木津を発し石枕川、青木川とも称し、末流は五条川となり庄内川に流入する。二之枝川は般若村近傍より分流するため般若川ともいい、中流部では尾張国府附近を南流し三宅川となり（写真）（5）（参照）さらに枝わかれして天王川（津島川）となり、佐屋川に合流する。三之枝川は草井村より分流して浅井川とも称し、中流部では日光川となりその派川は領内川となる。

第四の河川は北方村の東を流れて黒田川となり、木曾川に流入する（第3図



第3図 河道変遷図  
石枕川 青木川  
末流の三之枝川 浅井川  
般若川 日光川  
二之枝川 庄内川  
一之枝川 五条川  
三宅川 津島川  
領内川 天王川  
萩原川 蓋太川  
後川  
伊藤安男原図  
（明治21年測図）1:50,000縮小

参照)

あとがき

ヨーロッパの構造平野と異なり、わが国の平野は縄文海進以降に形成された堆積平野である。この形成には河道の変遷と治水問題を除外して論ずることはできない。

この調査研究に先鞭をつけたのが西村捨三の『治水汎論』（明治三年）である。しかしそのなかで養老元年（七一九）（作とされる猿投神社豊田市猿投町）の古地図を引用している。この尾張古図と称されるものを後世の偽作としたのは吉田東伍であり、明治三十五年（一八九〇）刊の『大日本地名辞典』（全七巻）で次のように述べている。その尾張国、中島郡の項で、近年、猿投宮の古図といふものをもてはやして、古代の地形

を論じる人が多いこの地図は中島郡海部郡ともまれるあたりを大海湾として海中に大洲を描き中島としている。『ふる古書の趣にあわず、疑つべきである。』としている。

西村捨三の論は当時の学的水準よりみればやむを得ないが、吉田東伍の説はまた卓見といふべきである。この古図は近年まで各町村史などで引用されており、史家たちの地理的指向の低さを物語っている。

この濃尾平野の地形発達史と河道変遷について画期的研究をなしたのが、故大矢雅彦氏（早稲田大学名誉教授）の『木曾川流域濃尾平野水害地形分類図』である。この図が作成された四年後の昭和三年（一九五九）に伊勢湾台風があり、当時の中部日本新聞は「地図は悪夢を知っていた」（仏科学）として魂政

治）入れず、「ピタリ一致した災害予測」などと大きく報じた。この分類図は現在のハザードマップの先駆をなすものであり、現在でも高く評価されている。これと同様なことは阪神淡路大震災において、埋没地形の旧河道に立地した家屋の被害がもつとも大きかったことが高橋 学氏（立命館大学教授）により調査され、マスメディアに大きく報道された。

参考文献・注

- 青木伸好、伊藤安男、輪中 洪水と人間との相剋の歴史、五一頁、学生社、昭和五四年
- 大矢雅彦、河道変遷の地理学、一頁、古今書院、平成一八年
- 脇田は現海津市平田町蛇地、脇田海用は、みよ、澤または乙澤、水用ともいい、輪中地域では切所（破堤地）のこと、岐阜県、岐阜県治水史（上）、一一五頁、岐阜県、昭和二八年
- 切所地を落堀とする説があるが江戸期の『地方凡例録』によれば落堀は排水用の用語であり、押堀が正しい、伊藤安男、治水思想の風土、一七八―一九〇頁、古今書院、平成六年
- 森 義一、平田町史（下）、八六八―八七一頁、平田町、昭和三九年
- 伊藤安男、額田雅裕、濃尾平野における河道の変遷と大樽川の開削について、郷土研究、岐阜第四八号、昭和六二年
- 伊藤安男、宝曆治水とその問題点、大樽川洗濯をめぐる『自然再生と地域環境』、所収、名古屋大学大学院環境学研究所、平成一六年
- 前掲書、五八頁
- 日本学士院日本科学史刊行会、明治前日本土木史、新訂版、一〇四頁、臨川書店、昭和五六年
- 井関弘太郎、木曾、長良、揖斐川の河床高変化、名古屋大学文学部研究論集四四、昭和四一年
- 井関弘太郎、寺島莊八郎、名古屋附近における沖積層下底面の地形地理学評論三二、九、昭和三四年

# 民話の小箱

## キツネのひんじつ 木曾岬町

渡し舟にまつわるお話です。

ある晩、船頭さんの家に、たいそう美しい女が訪れました。

「明日の晩、つたこおりへ船を出してください。」

「つたこおり」とは今で言う、知多半島。

「ここからは、海を渡らなければなりません。」

真う暗な夜に船を出すのは、とても恐ろしいこと。

恐れをなす旅人も多かつたそうです。

「船賃は、たとと払います。どうぞお願いします。」

女の熱心な頼みを、船頭さんは

二つ返事で引き受けました。

さて翌晩、男女に老人子どもが、ぞろぞろやってきました。

みな、不思議と女によく似た顔つきです。

「あの灯りの方へやってください」と女が指す方を見ると、

黒々と広がる海のはるか向こうに、灯りが見えました。

ところが、とれだけ櫓を漕いでも

灯りは近づいてきません。

よつやく岸に着いたのは、

東の空が白みはじめた頃でした。

着いたとたん、お客たちはいつせいに船から飛び降り、

みるみるうちに、一人残らず駆け去ってしまいました。

「つたあ、船賃よらせ。」

すると、後ろに小判が山と積まれて、光っていました。

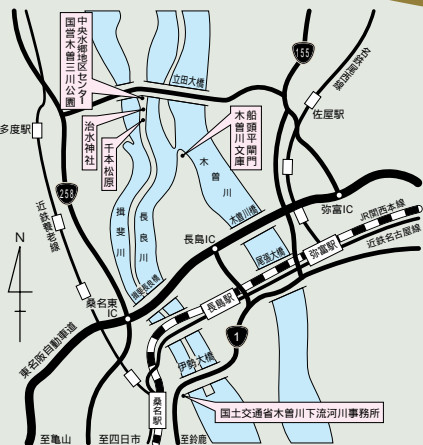
後で見てみると、その小判は全部、ただの木の葉。

あれあれ、



どうやらキツネに化かされてしまったようです。  
その後、村ではとんとキツネの姿を  
見かけなくなりました。

## 木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分  
《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)、年末年始  
《入館料》無料  
《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分  
名神羽島I.Cから車で約30分  
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》  
船頭平開門管理所・  
木曾川文庫  
〒496-0947 愛知県  
愛西市立田町福原  
TEL(0567)24-6233



表紙写真 上左:伊勢湾台風締切記念碑 上右:木曾岬神社 下:木曾川

### 編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、三重県木曾岬町の皆様及び、伊藤安男氏にご協力いただきありがとうございます。ご期待ください。

今回は、岐阜県池田町を特集します。ご期待ください。

宛先「KISSO 編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ  
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>